

メルロ＝ポンティ哲学における文学と両義性

九〇

加 國 尚 志

モーリス・メルロ＝ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961) の哲学の歩みにおいて、文学あるいは文学的な言語表現の問題についての考察は、完成した著作としては明らかにされることはなかったとはいえず、彼の哲学の全体を理解するうえで欠かすことのできないものとなっているように思われる。

彼が最初の二つの著作『行動の構造』や『知覚の現象学』で精神と自然の関係をとりあげ、そこに行動や知覚に関わる生きられた身体のありかたを見出し、そこからデカルト以来の二元論的哲学の思考法を批判したことは周知のとおりである。そのかぎりでは、彼の哲学が身体の哲学あるいは知覚の哲学と呼ばれることは当然のことと言えよう。客観主義的思考によって見失われた、生きられた身体としての現象的身体の経験への回帰という主題がこれらの著作を貫いており、そのことは、彼が後期フッサールの現象学を身体論の観点から大胆に展開したことに深く結びついている。メルロ＝ポンティの一般的な哲学史的評価や位置づけがまずもってこの点に定位されることは、おそらくほとんど異論の出ない定説であると言つてよい。

他方で、メルロ＝ポンティ自身の哲学的展開において、彼の哲学がその後もはや行動や知覚の問題にとどまらず、「言語の現象学」あるいは「表現の現象学」を目指すものであったことも周知のことである。彼はそ

れを『世界の散文』という著作として世に問おうとしたが、結局それは完成せず、彼の没後に遺稿として公刊された^②。生前に論文の形で刊行されたものは、『シーニュ』に収録された「間接的言語と沈黙の声」「言語の現象学について」などである。すでに彼の哲学における言語の問題について多くの研究が出されているが、彼の言語哲学は著作の形で世に問われることはなく、未完成のままに終わったのであって、彼の言語哲学の最終的到達点を示す文献資料というものは、現段階では存在しないのである。

一般的には、メルロ＝ポンティの言語哲学をまずは言語学と現象学の交差点に置くという解釈は穏当なものではある。それはメルロ＝ポンティが公表した一九五一年の「言語の現象学について」から示されるとおりであり、ソシュールに想を得た言語学的考察とフッサールの生活世界と制度化の現象学（とりわけ『幾何学の起源』に見出される）とを結びつける点に求められる。それは「語る主体」(le sujet parlant) と制度 (institution) の関係、パロールとラングの関係について「身体」を軸にした考察を展開している点で、言語学と現象学を結びつけて考える上での重要な寄与とすべきものである。しかし、果たしてそれがメルロ＝ポンティが言語学について考察したこと全体であるかと言うと、必ずしもそうは言えない。論文の形で明確に提示されることはなかったとは

いえ、文学の言語についての考察は、メルロ＝ポンティの思想に一貫して継続的であり、この点についての目配りを欠くと、彼の言語哲学の全体像を描くことは不可能になってしまう^③。

紙幅も限られた本論ではその本格的な論証については他日を期すこととして、ここでは前期メルロ＝ポンティにおける文学と言語の関係をとらえるために、ひとまずいくつかの論点を指摘しておくにとどめたい。

第一に、初期の著作における文学作品への参照とそこでの哲学的記述との関係を挙げることができる。メルロ＝ポンティの最初の二つの著作は、たしかに「行動」や「知覚」についてのゲシュタルト心理学の成果をもとに、そこに現象学的な考察を加えて、従来の超越論的主観の哲学を批判する「新たな超越論的哲学」を展開しようとしたものであり、とりたてて文学の言語の問題は扱われていないように見える。

しかし、注意深くその叙述を追っていくと、すでに『行動の構造』において、たとえばクロードルの『詩法』で用いられた「共に一生まれる」(co-naitre)という概念がデカルトの『屈曲光学』批判の文脈で用いられ、身体の志向性をめぐる議論の文脈でブルーストの『失われた時を求めて』(「ゲルマンのほうへ」)が参照されているのを見出すことができる。これらは単に都合の良い表現を文学作品から借用したようにも見えるが、後期に至るまで、クロードルやブルーストはメルロ＝ポンティにとつて重要な参照作家であることも忘れられてはならない。彼の最後の講義では、クロードル、ブルースト、クロード・シモンの作品が取り上げられ、デカルトの『屈曲光学』や『省察』の思想と一種の対照をなす形で論じられている。きわめて潜在的な形であるとはいえ、こうした文学作品への参照は、最初の著作である『行動の構造』においてすでに見られるものである。

さらに『知覚の現象学』になると、より大胆に顕著な形で文学作品が

メルロ＝ポンティ哲学における文学と両義性

参照される。たとえば、メルロ＝ポンティの身体概念に決定的な寄与をなした「身体図式」の概念を説明する箇所では、ブルースト『失われた時を求めて』(「スワンのほうへ」)での「過去の番人としての身体」の概念が参照されている^④。メルロ＝ポンティの身体概念は、身体そのものが時間を保持する点で、ベルクソンの身体概念とは決定的に異なっており、ブルーストの「過去の番人としての身体」こそが、彼の身体概念に一致する表現なのである。さらに先述の「共に一生まれる」が相互感覚の問題とともに提示されているのに加えて、「沈黙のコギト」と言語の関係について、クロードルの「フランス詩の詩句についての諸考察」での「読者の精神の内に隠された口」という表現が用いられている。そして、「時間性」についての章では、フッサールにおける時間の受動的綜合を説明する文脈で、クロードルの『詩法』から「時間は、これから存在することになる万物に、それがもはや存在しなくなるために贈られる手段である」という文が引用されている^⑤。そして、これはサルトルが『存在と無』で行ったことに触発されたことではあるが、ブルーストの『失われた時を求めて』(「スワンのほうへ」)でのオデットに対するスワンの嫉妬の変遷が言及されている^⑥。その他にも、歴史的事件についての個人的視点による把握の考え方について、スタンダールの『パルムの僧院』でファブリスがワートルローについて抱いた感想などが重要な参照として言及されている^⑦。

こうした参照はすべて、哲学研究においては、他の表現で説明できないわけではないがただ適切な表現が文学の中に見出されたただけだ、と、そのように扱ってよいものだろうか。それはよくできた「文学的」な「比喩」表現にすぎず、そうした表現が取り出された文学についての知識など一切なくとも、メルロ＝ポンティの現象学的あるいは現象学心理学的記述は十分に理解される、と言うべきだろうか。哲学において、あるいはそ

れが広すぎるなら少なくとも現象学において、その哲学的叙述（あるいは、それと同義ではないことはもちろんのこととして、現象学的記述）において「比喩」表現を用いることについては広範な、複雑で多様な議論がありうるし、事実、その問題は今まで議論されてきている。おそらく、哲学（あるいは現象学）にとって「比喩」や、メルロ＝ポンティが思想の理解に重要と考えた「スタイル」（文体）はどのように位置づけられるのか、という議論は、単にメルロ＝ポンティの哲学の全体像を理解するという問題設定を超えて、非常に大きくて決着の困難な問題を提供することになるだろう。④ここでは、ひとまずメルロ＝ポンティの、ほとんど文学とは無縁と思われる初期の著作における文学作品の参照について指摘することで満足しておくこととしたい。

つづいて第二に、メルロ＝ポンティが『知覚の現象学』において展開している言語論は、文学の言語を積極的に論じるものではないとはいえず、それを無視しているわけではない、ということが挙げられる。

周知のとおり、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』で、「語りつつある言葉」（parole parlante）と「語られた言葉」（parole parlée）とを区別し、前者は「意味志向」が「生まれつつある状態（état naissant）」にある言葉であり、後者は「既得の資産」として「処理可能」な意味と結びつく言葉である、としている。この「語りつつある言葉」は、「実存がある（意味）（sens）へと集中し」、「言葉を創造する」のである。他方で、「語られた言葉」の方は、既得の意味として、文化的な制度として理解可能となった言葉である。⑤

もちろん、メルロ＝ポンティは単純に両者を対立させて、創造的な「語りつつある言葉」を賞揚しているわけではない。既得のものとして制度化された「語られた言葉」も、かつては創造的な「語りつつある言葉」であったものが、時を経て社会的に、また文化的に一般的な表現として

慣用化されたものであり、哲学者や作家といえども、まずはこの「語られた言葉」を用いることによってしか表現を行うことはできないのである。しかし、また、今までに存在していた語彙の思わぬ用法によって、何か決定的に新しいことが言われ、新しい「意味」がそこで生まれた、と言えるような経験が言語表現にはあることをメルロ＝ポンティは語っているのである。そして、ここでの「意味」（sens）は、単に概念的に定義された意味内容や辞書的な語義のことではなく、発生状態にある意味として、「感覚」（sens）と決して切り離すことのできない「意味」なのである。メルロ＝ポンティの哲学を貫く「意味」と「感覚」の深い連携は、表現の側から見れば「語りつつある言葉」のあり方を問題にすることなしには十分に理解されないであろう。

この、言わば意味の発生状態を生み出す言葉のあり方は『知覚の現象学』では、さしあたっては主題化されていない。それは「コギト」の章で「原初的な言葉」と「二次的な言葉」、あるいは「超越論的な言葉」と「経験的な言葉」の区別⑥として取り上げ直されるが、言語そのものに内在する意味創造的な機能については十分には考察されていない。それは『知覚の現象学』の主題からは外れることでもあったのである。⑦

したがって、『知覚の現象学』以降のメルロ＝ポンティの哲学的展開において意識されながら十分に展開されなかった主題とは、まさに、この「語りつつある言葉」とはどのようなものか、ということであり、「言葉」が「語りつつある」状態にあるとか、言語において「意味」が「生まれつつある」状態にあるとは、いかなることなのか、ということでもあれば、そうした状態をひき起こす言語のあり方とはどのようなものか、ということでもある。それは何も文学に特別なことではなく、言語が一般的にそのような機能を持つ、ということであるなら、殊更に文学における言語の使用を問題にする必要はない。文学は言語の意味生成的な一般

的機能の上に形成されるにすぎないのだとしたら、文学における言語の使用を特別視することなく、それを言語の一般的機能の一変種に還元することで問題は解決されよう。

しかし、メルロ＝ポンティは、結局未完に終わった『世界の散文』で次のように述べている。

「われわれは、文学における言葉の機能を明るみに出すことに取り組みつつ、この研究を始めようとしているだけであり、したがってより完全な解明については、もう一つの別の著作のために保留しておくこととしよう。」¹⁸⁾

この「もう一つの別の著作」は書かれることがなかった。著作としては、である。だが、一人の哲学者が考えつつあったことを考えるのではなくて、その思考を追体験したことはならないのだとしたら、そして哲学者の思想の全体像とは、その書かれつつあったけれども書かれなかった著作をも除外することを許さないものだとしたら、私たちは、著作の周縁で哲学者が準備しつつあったものにも目を向けてみる必要がある。ここでは、まずメルロ＝ポンティが文学を言語の問題から扱う以前に、道徳の問題としてとらえていた時期の論文を中心に考察してみることとしたい。

雑種の表現と両義性のモラル

メルロ＝ポンティが文学における言語使用の問題に取り組もうとした契機に、サルトルの『文学とは何か』（一九四八年）があったことは言うまでもない。哲学的には常にサルトルの批判者であり、後には政治的な

見解の相違から決別してしまおうとはいえ、この時期のメルロ＝ポンティは雑誌『現代』をサルトルと共同で主催しており、友情で結ばれた共同作業者だったのである。それは、たとえば『意味と無意味』（一九四八年）に収録された「スキヤンダラスな作家」や「実存主義論争」といった、当時教会からもマルクス主義者からも批判を受けていたサルトルを擁護する文章にも明らかである。そのメルロ＝ポンティにとって、サルトルの『文学とは何か』が、それに対して自分の独自の論点を提示しなくてはならない著作として受け止められたことは、想像に難くない。『世界の散文』の編者序文で、クロード・ルフォールは次のようなメルロ＝ポンティの日付のないメモを紹介している。それは、サルトルの『文学とは何か』に対抗して、メルロ＝ポンティが自分なりの文学論を書くことを意図していたことを示している。

「私も『文学とは何か』のようなものを書かねばならない。それは、記号と散文について、より長く論じた部分からなるが、文学の論法全体についてではなく、文学的な五つの知覚…モンテーニュ、スタンドール、ブルースト、ブルトン、アルト…についての部分からなるものである。」¹⁹⁾

これは単に、思いつき程度のものであったわけではない。事実、メルロ＝ポンティは、後に『シーニュ』（一九六〇年）に収められた「モンテーニュを読む」（初出一九四七年）を発表しているし、一九五二年の講義ではスタンダールの偽名問題とヴァレリーの沈黙期間の問題を扱い、先述したとおり、一九五四年講義ではブルーストにおける嫉妬の感情の「制度化」を論じている。²⁰⁾ またほんのわずかとはいえ、一九五一年の講演「人間と逆行性」では、ヴァレリーとブルトンが言及され、「自然発生的な言

葉」(parole spontanée)について触れられている。²²この講演が、ソシユールの言語学とフッサールの現象学を論じた「言語の現象学について」と同年であることは示唆的である。後者が学会発表として学術的な体裁をとり、前者が一般向け公開講演であることもあって、もっぱら哲学の学界では後者がメルロ＝ポンティの言語論として取り上げられることが多いが、メルロ＝ポンティの構想としては、それらの内容をすべて含んだ著作が目論まれていた、ということになる。先にも述べたことであるが、この両者を分離することなく把握するのでなくては、メルロ＝ポンティ言語論の全体像はつかめないにちがいない。

しかしまた、メルロ＝ポンティがただ単にサルトルの『文学とは何か』に触発されて『世界の散文』を構想したというわけでもない。メルロ＝ポンティは一九四五年に、ボーヴォワールの『招かれた女』の評論「小説と形而上学」を発表している。ボーヴォワールは高等師範学校でメルロ＝ポンティの同級生であったわけだから、いかにも内輪褒めのようにも見えるが、この論文は『知覚の現象学』とその次の著作『ヒューマニズムとテロル』の時期のメルロ＝ポンティの他者論や道徳観をかいま見せるものである。この評論は、『意味と無意味』で、「セザンヌの懷疑」「映画と新しい心理学」と並べて収録されており、絵画、映画と並ぶ、当時のメルロ＝ポンティの文学への関心を示唆している。

メルロ＝ポンティはそこで、二〇世紀の哲学において哲学と文学の「種的な表現」(expression hybride)が登場していることに注意をうながしている。²³たとえばその好例はシャルル・ペギーであり、それは日記と哲学的考察と対話からなるものであって、そこでは哲学と政治と文学が、それぞれに異なった仕方ではあれ、雑種的に混ざり合った表現の様相をとっているのである。メルロ＝ポンティはペギーを引用しながら、そこに「潜在的な形而上学」(une métaphysique latente)があることを指摘

する。²⁴古典的で合理的な形而上学は、合理性の地盤が確立されていたのだから、「概念の組み合わせ」(un agencement de concepts)によって人間と世界を理性的に理解させることができる²⁵と確信しており、したがって、哲学の言語は文学の表現に何も借りるものはないと考えていた。プラトロンが「同」と「他」の概念について考えたことを、そのまま私と他者の関係にあてはめられる、と考えたり、デカルトが本質と現実存在の同一性としての神の概念を自我の定義に関わらせたりするような形而上学的思考は、結局、概念の組み合わせから現実存在を引き出すと自負していたことになる。哲学の概念と世界の間には透明な対応関係が認められていたのである。

しかし、メルロ＝ポンティによると、そうした古典的な形而上学に対して、現象学や実存主義が提示したのは、「世界についての一切の思考に先行する世界との接触」²⁶という意味での経験の表現である。世俗的で具体的な人間関係や人間心理は文学が物語として描き、そうしたものは切り離された理念的世界の形而上学は哲学が概念の構築物として描く、という区別はもはや通用しない。このように考えると、「文学の仕事と哲学の仕事はもはや切り離すことができない。」²⁷「同」と「他」の概念分析から形而上学的な他者論を組み立てることはできるが、現実には必ずしも当てはまらない。それは私の目の前にいる「この他者」には適合しないからである。私の目の前にいる「この他者」との関わりを記述するとすると、「哲学的表現は文学的表現と同じ両義性 (les mêmes ambiguïtés) を担うことになる。」²⁸私の目の前にいて現実に私に関わる「この他者」は、「他者一般」や「絶対的他者」の定義から割り出すことはできず、哲学者に「完全な透明さ」をもつ表現を断念させることになる。「この他者」は合理的な哲学概念をもつばら裏切るのである。

したがって、メルロ＝ポンティによれば、合理的な形而上学、概念の

組み合わせと演繹による哲学は、いつでも他者一般の概念を取り上げるばかりで、「この他者」についての他者論を形成することに失敗することになる。ただ概念的に演繹される絶対的他者ではなく、私たちの経験において姿をとり、目に見える他者との具体的な関わりを問題にするや否や、哲学は文学的な両義的表現を引き受けざるをえないことになる。他者論の可能性は、哲学の表現のあり方そのものをも問題にしており、或る種の文学の中に内在する哲学的他者論というものがあることになる。

メルロ＝ポンティは、こうした例をボーヴォワールの小説『招かれた女』(L'Invitée)^⑧の中に見ている。ボーヴォワールのこの小説は、互いに自由であり完全に一致していると信じているカップル(フランソワーズとピエール)が、彼らが「お客さん」としてしか見なしていなかった第三者(グザヴィエール)の登場によって、一種の三角関係に陥り、他者の存在の介入によって関係が破綻してしまう顛末を描いたものである。

お互いの自由を認め合い、完全に一致しているカップルを自認していたフランソワーズとピエールは、嫉妬という感情にとらわれることはなはずであったのに、ピエールがフランソワーズの教え子であるグザヴィエールと付き合いますことで、フランソワーズはピエールとの関係が欺瞞であったことを悟ることになる。フランソワーズはやはり嫉妬と不安を覚えざるをえないし、ピエールはやはりフランソワーズを裏切っているのである。カップルは(二つのカップルからなる)トリオになることはできないのだ。フランソワーズとピエールがグザヴィエールの存在を、自分たちの関係を脅かすことのない程度の「お客さん」としてしかとらえないのなら、この二人は他者を排除した世界で生きていることになる。完全な相互承認の上に成り立っているように見えたこの二人の自

由な共同関係は、あらかじめ他者を完全に排除しておくことによってしか成り立っていなかったのである。この自称完全なカップルはトリオであることを最初から除外している。第三者(浮気相手)は、二人の関係を脅かすことのない部外者でしかなく、したがって自分たちと同じ資格で存在する他者ではないのである。逆に、グザヴィエールの存在を彼女の嫉妬の感情まで含めて認めるなら、フランソワーズは、ピエールとの関係が成り立たないことを認めざるをえなくなる。愚かしい小娘としか見なしていなかったグザヴィエールがピエールを奪うと、フランソワーズは自信を失い、グザヴィエールの眼から見たらそう見えるにちがいない老けた女として自分を感じてしまう。グザヴィエールの存在を認めざるをえないがゆえに、三人の人間がそれぞれカップルとして成り立つことを認めることができなくなる。

メルロ＝ポンティはここで、こうした三角関係を道徳的な観点から批判することには意味がないことを指摘している。自分がやってくる以前に完全な関係が成立して愛し合っている(と思ひ込んでいた)二人(フランソワーズとピエール)の関係を破綻させてしまうグザヴィエールが悪いのか。だがグザヴィエールを誘惑したのはピエールである。それでは自由で互いを拘束しない関係という約束を盾にフランソワーズを裏切ったピエールが悪いのか。だが、ピエールが他の女性とつきあうことをフランソワーズはお互いの関係の中で認めていたのである。フランソワーズとピエールは、相互の承認にもとづく完全なカップルを自負する以上、お互いの自由を完全に尊重し、他者の介入によってはゆるがないカップルのはずだったのである。それでは、ピエールと互いに束縛しない自由な関係という約束をしていたのに、ピエールとグザヴィエールの関係に嫉妬と敗北感を感じるフランソワーズが悪いのか。

この場合、誰か一人だけが全面的に正しく、誰か一人だけが全面的に

悪いわけではない、とメルロ＝ポンティは解釈する。ここでの三角関係における嫉妬の感情は、道徳的に解決不能の様相を呈するのである。メルロ＝ポンティは、現実の人間関係において、道徳的に裁決することができない局面があることを指摘する。

「ドラマの中で各人に帰されるものを計算したり、諸々の責任を評価したり、物語の本当のバージョンを与えたり、諸々の出来事を視野に収めることは不可能である。最終的な判決 (Judgement dernier) というものは存在しない。われわれはドラマの真理を知らないだけではなく、そのようなものは存在しないのであり、そこで真と偽が、正義と不正が裁決されるような事の真相などというものは存在しないのである。われわれは解きたい混乱の中で、世界や他者と混ざり合っているのである。」³⁰⁾

メルロ＝ポンティの解釈の立場が、単なる相対主義や懐疑主義ではなく、また単なる反道徳主義でもないことは注意しておくべきだろう。彼が述べているのは、「この他者」との具体的な関係においては、単純な道徳的裁決が不可能な人間のドラマがあることもまた真であることを認めることなのである。現実の人間の生活には道徳的ジレンマがあり、その最終的判決が不可能であることがある、ということを確認することは、道徳が不可能である、と帰結することではない。メルロ＝ポンティが主張するのは、「われわれの行動というものは唯一の動機や唯一の説明を認めるものではない」ということである。人間の自由に基づく行動の持つ偶然性や矛盾を認めた上で、多義性から逃れることのできない人間相互の交流 (communication) の場から決して身を引かないという逆説的な道徳をメルロ＝ポンティは主張しているように思われる。

「真の道徳は、外的な規則に従うことや客観的価値を尊重するところに成り立つのではない。正しくあり、かつ救済されてあるための手段というものはない。」³²⁾

したがって、メルロ＝ポンティは文学作品としての小説の中に、古典的な道徳哲学とは別のところで、道徳的ジレンマの内部で生きる人間の葛藤の肯定を読み取っていることになる。懐疑主義や決疑論として表明される以前に、道徳的な非決定性の中で、道徳的な裁決を待たずに可能な限りの行動を行なう人間の姿を描く文学作品の中に、単なる概念の組み合わせや演繹によるのではない、具体的な他者との道徳的に困難な関係に内在する「潜在的な形而上学」の表現を読み取っているのである。

この短い評論が『知覚の現象学』の公刊と同年に公表されていることは注目に値する。『知覚の現象学』の他者論は、基本的に身体と知覚に定位置した現象学的な相互主観性論であり、道徳の次元での他者論は論じられていなかった。「小説と形而上学」は、その意味で、メルロ＝ポンティの他者論の道徳論的展開の可能性を素描しているのである。³³⁾

ジレンマと両義性

このような両義性のモラルを、たとえばメルロ＝ポンティはモンテーニュに見出しているように思われる。「小説と形而上学」の二年後、メルロ＝ポンティは「モンテーニュを読む」という評論を発表している。そこで、モンテーニュの懐疑主義について、彼は次のように述べている。

「モンテーニュはすべての真理が矛盾していると教えることに始まり、おそらくは、その矛盾が真理であることを認めることで終わる

のである。∴ 矛盾の最初にして最も根本的なものは、それによつてそれぞれの真理を拒否することが新種の真理を発見することになるような矛盾である。」³⁴⁾

メルロ＝ポンティは、モンテーニュの懐疑主義が、「真理は存在しない」という帰結に向かうのではなく、「矛盾が真理である」ということを認めるものであることを指摘している。たとえば、モンテーニュは公共的な世間との関係を絶つて「自己」に沈潜し、自己を対象として『エッセー』を執筆し、言わば自己の哲学と云うべきものを語っている。³⁵⁾しかし、その帰結はストア主義とはかけ離れている。自己を唯一の真理と認める独我論的境地を語るどころか、自己が自己によつては所有しきれないこと、自己について断言できることが何もないことを認める哲学である。そしてド・ラボエシとの友情を語る段になると、唯一無二の友人との魂の合一が語られ、死んでしまった友人の思い出とともにある生が語られるのだから、これは独我論ではありえない。私の魂は友人と一体であり、友人が私について持つ判断の方が、私が私について持つ判断よりも正しい、ということ認めるのであるから、モンテーニュの「自己」論は、他者との関係を排除しないどころか、他者との関係を基礎に置きながら展開されているのである。ド・ラボエシとの友情がなければ、『エッセー』は存在しなかつただろう。だが、それでも友人は一人だけしか持てないと考えているのだから、モンテーニュは、死んでしまった友人との親密な関係を除いては、一般的には現存する他者との関係を排除しているのではないだろうか。しかし、モンテーニュは、「死」について語りながら、「死」から自己の生の意味をひきだそうとする考え方を批判する。人は「生きている者たちの間で生きねばならない」³⁶⁾。私は、自己とともに、死んでしまった友人とともに、その他の生きている者たちとともに

に生きていたのであって、モンテーニュにおいては、「自己であること」「友人のみとともにあること」「他者とともにあること」という三つの矛盾した要請のすべてが、そのまま受け入れられているのである。

「絶対的な拘束を可能にするのは無条件の自由である。モンテーニュは自分自身についてこう言っている。(私は、約束をすることについては非常に儉約する人間なので、約束した以上のことを果たしはしたけれども、義務を負っていたわけではないと思う)。彼は、皮肉屋であると同時に深刻、自由であると同時に忠実、という存在の秘密を探し、おそらくはそれを見つけたのである。」³⁷⁾

メルロ＝ポンティがここで「存在の秘密」と呼んでいるものが「両義性」である。矛盾した二つの項が「同時に」(en même temps)並び立つてしまうときに、同一律と合理性を重んじる哲学者なら、それを認めずに一方を選択して他方を排除することを求めるだろう。ジレンマは何らかの根拠から両断されねばならないことになる。だが哲学的な論理で構築されているわけではない現実を生きる人間は、そのような一見合理的な選択の内部のみで生きることができない。自己への義務と他者への義務に優先順位をつけられない場合、そのどちらかを選ばざるをえない私たちは正しいと同時に誤つてもいる。法や倫理が推定的にせよ直観的にせよ根拠に基づいてこの両義性の絆を切断する裁決を下す以前に、私たちが正しくかつ誤つて生きている現実の経験を記述する文学の言語の場が開かれている。それは生きられた矛盾を裁くのではなく記述することである。³⁸⁾

両義性の言語

一九四五年から一九四七年頃まで、メルロ＝ポンティがこのような「両義性のモラル」を文学の表現の中に見出そうとしていたことを簡単に見てきたわけだが、もちろん、この「両義性」は、単に優柔不断な曖昧さとは区別されなくてはならない。

一九五一年の講演「人間と逆行性」では、講演後討論が行われ、そこでメルロ＝ポンティは「両義性」について語っている。討論の途中でジャン・ヴァールがメルロ＝ポンティの講演における「両義性」の重要性に参加者の注意を向け、それに促されて、ジャン・スタロバンスキーやジョルジュ・プーレらが発言をしている。

ジャン・スタロバンスキー「解決のない両義性や、思想の終点であるような両義性が問題ではなく、新しい両義的な諸状況を創り出すことで私たちが両義的な諸状況から解放してくれるのを助けてくれる両義性が問題なのでしょう。」^④

この発言に続いて、メルロ＝ポンティは次のように答えている。

メルロ＝ポンティ「厳密な意識とは厳密への好みであり、同時に、与えられたもののうちには厳密ではないものや曖昧なもの (obscur) があるということについての意識でもある、ということを示すことで私が言おうとしたのも、そうしたことです。一般的に、同じ哲学者が、合理主義的な強い意志を持ち、非合理的なものへの極度の感受性を持っているものなのです。」^⑤

メルロ＝ポンティの返答は、哲学的に厳密な意識には、厳密であることの不可能性についての意識も含まれている、ということである。したがって、両義性とは、単に曖昧にしてごまかすことではなく、人間が矛盾や曖昧さを抜け出すことができずに生きていることについての厳密で明確な意識の表現でもある。それでも「両義性」という言葉には、「曖昧さ」を含蓄する消極的なニュアンスがともなうのも事実である。ジョルジュ・プーレがその点について、次のように質問している。

ジョルジュ・プーレ「両義性の乗り越えについてのこの問いはきわめて重要なものですし、私は詩的言語との関係についてまさにそのことを語りたいと思います。私がメルロ＝ポンティに尋ねたいのは、彼にとって、詩的言語は本質的に両義的であるのかどうか、他方で、詩が両義的なのか、あるいは両義的なのが詩なのか、ということです。

私たちは、ランボオの言語やマラルメの言語が両義的である、とためらうことなく言わねばなりません。しかし、またある意味においては、ランボオの詩やマラルメの詩は、それらが本当に詩であり、それがまったく成功している場合には、この最初の両義性の彼方にある、とためらうことなく言わねばなりません。そしておそらく、あらゆる詩の目的は両義性から逃れることであり、両義性としてのこの種のアンガジュマンから離脱することなのです。」^⑥

プーレが述べているのは、詩人の用いる言語が両義的だからといって、詩が両義的であることにはならない、ということであり、詩の言語は、人間の生きる両義的な状況を超えている、ということである。メルロ＝ポンティが両義性の問題を認めている文学が基本的には散文のそれなの

で、散文の持つ両義性と両義的な状況の表現を詩的言語まで拡張することが可能かどうかと（むしろ反語的に、不可能なのではないかと）問うているわけである。それに対してメルロ＝ポンティはきっぱりと反論している。

メルロ＝ポンティ「あなたは両義性という言葉をも、私が用いなかった意味で受け取っておられます。もう一度申し上げますが、私はそんなことは話しておりません。あなたは両義性を表現の〈失敗〉とお呼びになる。私が言いたかったことは、表現の成功というものである——このような意味でなら、悪しき両義性からは離脱されるのです——ということです。しかし表現のこれらの成功は、言語的創造や芸術的創造、あるいは科学的創造、強い意味での創造から結果するのです。これらの創造は、この言語に安全を与えるような、つまり、落下に備えて曲芸師の下に張っておかれる一種の網のようなものを言語に与えるような既存の観念の総体によって保証されているわけではないのです。これが私の言いたかったことのすべてです。ですから、両義性は失敗などではないのです。」⁴⁴

「両義性」は単に曖昧な、失敗した表現のことなのではない。そうではなく、「小説と形而上学」で述べられていたように「概念の組み合わせ」ではとらえられないような現実を記述する言語の創造的側面であり、そこには「既存の観念の総体」による安全保証はないような言説の創造的側面のことなのである。プーレはメルロ＝ポンティの言葉をひきとって、次のように言い換え、今度はメルロ＝ポンティは同意を示している。

プーレ「この点で、私はあなたを理解できると思いますが、私に

メルロ＝ポンティ哲学における文学と両義性

は、詩をほとんど不純な何かとして、そして同時に絶対的に純粋な何かとして考察しなくてはならないように思われます。もつとも、あなたの両義性の概念でこの純粋性をいかにして考察しうるのか、私は自分に問うてもいるわけですが。」⁴⁵

メルロ＝ポンティ「それこそまさに両義性です。それは、純粋なものとは不純であり、不純なものは純粋だという事実です。」⁴⁶

したがって、両義性とは、単なる曖昧さや混乱 (confusion) のことではない。それは不純であると同時に純粋な何ごとかである。プーレは詩の言語はそうしたものだ、と述べており、メルロ＝ポンティはそれに賛意を表している。それでは、哲学の言語はどのようなものなのか。メルロ＝ポンティが「小説と形而上学」で述べたことをもう一度思い出してみればだろう。哲学の言語も文学の言語と同じ両義性を引き受けているのであるなら、哲学の言語も「不純であると同時に純粋」なるものであることになるだろう。純粋な哲学の言語というものが不可能である以上、哲学の言語もやはり哲学の言語としては、不純な言語の創造作用を通して語っていることになるだろう。

結論にかえて

このように、『知覚の現象学』以降のメルロ＝ポンティの哲学における文学の位置づけを見てきたが、それはまず具体的な生活における道德の両義性を表現する言語に定位されていたことがわかる。状況の外に立つて道德的な純粹さの立場から裁決を下すとしたら、人間の行為は善と悪、真と偽、正義と不正の二者択一的な二分割にかけられるだろうし、そこ

での道徳的非決定性はジレンマとして表現されるだろう。メルロ＝ポンティが当初、文学の表現のうちに見出したのは、このようなジレンマが避けがたい状況の内に生きざるを得ない人間の経験の構造が、道徳的な決定以前の両義性を備えているということであつたように思われる。そして哲学が、こうした経験の構造に入り込もうとする限り、道徳的な決定以前の人間の生活や人物の性格を描こうとする文学の言語を無視することはできない、ということである。革命や戦争のような状況に生きていく人間に、その外から純粋な道徳を適用することは行動の意味の多義性に対する抽象化や単純化であり、それを内から理解しようとすることの放棄であるのと同様に、日常的な恋愛や人間関係における道徳的葛藤を未裁決のまま記述する言語を放棄することは、哲学の側からその葛藤の経験の構造を理解しようとするのを放棄することでもある。メルロ＝ポンティが、哲学の言語は文学の言語が同じ両義性を担わねばならない、と述べたときに、それに加えて次のように述べていたことを思い出しておかねばならない。

「絶対的な無垢は存在しないが、同じ理由で、絶対的な罪責性も存在しない。すべての行動は、私たちがまるごと選んだわけでもなければ、その意味で私たちが絶対的に責任があるわけではない一つの状況に応答している。」^④

文学が道徳を語る以前にそれを具体的な人間の行動を通じてその経験の構造にまで探究する際に、それは暗黙のうちの一つの哲学を素描している。たとえばヘンリー・ジェイムズやブルーストの作品とはそうしたものである。^⑤しかし、この両義的な道徳的経験、あるいは前道徳的経験はただ文学的創作の範囲内にあるばかりではない。たとえばメルロ＝ポ

ンティが取り上げたように、アテナイ市民を前にしたソクラテスやカトリックから禁書処分を受けたベルクソンのような哲学者の経験の内にも、共産党から処分されたブハーリンやニザンのような活動家や知識人の経験の内にも、同じように見出されるのであり、それは概念の組み合わせから構成された他者論や歴史哲学ではすくいあげることのできない両義的な経験構造を提示しているのである。おそらくはモンテーニュやルソー、スタンダールやヴァレリーの内にも見出されるこうした両義性は、作家と呼ばれる人々の生の構造でもあつたにちがいない。通俗的な大衆を批判して軽蔑し、世間から身を引き、孤独の中で書くことを選びながら、結局は純粋な言語を断念して書くことによって社会へと送り返される。それはたしかに作家の言語の生まれてくる経験の土壌の両義性であり、自己と他者、個人と社会の関係において言語が不可避的に負わざるをえない両義性なのである。言語の問題を論じるに先立って、メルロ＝ポンティが文学の言語に見出した両義性は、人間が生きる世界の経験構造と不可分の両義性だったのである。

こうした両義性のモラルについての考察はやがて扱われなくなり、言語の創造性をめぐる議論、したがって言語の構造そのもの持つ両義性へとメルロ＝ポンティの関心は移行していき、論じられる対象も道徳的な「主題」を持った文学から、より存在論的で、詩的な文学の表現へと変化していく。それはほぼ、サルトルやボーヴォワールらとの交際が終わる時期と対応している。メルロ＝ポンティの哲学の歩みにおいて実存哲学の時期は終了し、やがては存在論的思索の時期が開始されることになる。しかし、そうであつたとしても、言語が個人と社会との、主体と歴史との両義的な関係を前提する以上、文学における両義的なモラルの表現の解釈は、哲学者の視点に沈殿して内在していたのだと言うことが

できよう。純粹な言語の断念は、純粹な道徳の断念と無関係ではない。メルロー・ポンティにおける言語表現の創造性と両義性をめぐる解釈は、それ自身、彼の思想形成の変遷とその多義性から切り離されえないのである。^⑧

注

- ① Maurice Merleau-Ponty, Un inédit de Maurice Merleau-Ponty, dans *Parcours deux, 1951-1961*, Verdier, 2000.
- ② Maurice Merleau-Ponty, *La prose du monde*, Gallimard, 1968.
- ③ メルロー・ポンティと文学の関係を考察した論文集として *Merleau-Ponty & le littéraire*, Presse de l'école normale supérieure, 1997 が挙げられる。また日本の研究者によって扱っているのは澤田哲生である。代表的な論文として 澤田哲生「後期メルロー・ポンティにおけるクロード・シモンとの位相について」『Azur』12 成城大学フランス語フランス文化研究会 二〇一一年 一九一三五頁。また Stefan Kristensen による研究も参考になる。Stefan Kristensen, *Parole et subjectivité*, Georg Olms Verlag, 2010, pp.140-155.
- ④ Thodore E. Geraets, *Vers une nouvelle philosophie transcendente*, Martinus Nijhoff, 1971.
- ⑤ Maurice Merleau-Ponty, *La structure du comportement*, PUF, 1942, p.213. メルロー・ポンティのクローデル解釈については Emmanuel de Saint Aubert, *Du lien des êtres aux éléments de l'être*, Merleau-Ponty *au tournant des années 1945-1951*, Vrin, 2004. 加國尚志「共同出生と同時性—メルロー・ポンティの哲学におけるクローデル文学の受容をめぐる一考察」『姫路人間学研究』二〇一一年 姫路獨協大学 一九九九年三月 三一—一四〇頁。
- ⑥ *Ibid.*, p.226.
- ⑦ Maurice Merleau-Ponty, *Notes de cours 1959-1961*, Gallimard, 1996.
- ⑧ Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Gallimard, 1945, p.211.

- ⑨ *Ibid.*, p.446.
- ⑩ *Ibid.*, p.469, p.479.
- ⑪ *Ibid.*, p.486.
- ⑫ *Ibid.*, p.416.
- ⑬ Natalie Depraz, *Selon quels critères peut-on définir une écriture philosophique? dans Merleau-Ponty & littéraire*, Presses de l'école normale supérieure, 1997.
- ⑭ Jerry H. Gill, *Merleau-Ponty and Metaphor*, Humanities Press, 1991.
- ⑮ 加國尚志「世界の記憶と時のイメージ—接木された現象学のために」『理想』No.661, 1998年7月 所収。
- ⑯ *Phénoménologie de la perception*, p.229.
- ⑰ *Ibid.*, p.446.
- ⑱ 「語りについてある言葉」と「沈黙」の関係については、加國尚志「沈黙の詩法—メルロー・ポンティにおける「沈黙」のモチーフ」『思想』二〇〇八年 第11号 岩波書店 所収 参照。
- ⑲ *La prose du monde*, p.23.
- ⑳ *Ibid.*, VII.
- ㉑ Maurice Merleau-Ponty, *Résumé de cours (collège de France, 1952-1960)*, Gallimard, 1968. なお、スタントールの偽名については、ジャン・スタロバンスキーの評論も参照。Jean Starobinski, *Stendhal pseudonyme*, dans *L'Œil vivant*, Gallimard, 1961. (邦訳「偽名家スタントール」『活きた眼』大浜甫訳 理想社 一九七一年所収)。同じくスタロバンスキーはチャレリーの『カイエ』に付した序文で、チャレリーの沈黙期間について論じている。Cf. Paul Valéry, *Cahiers 1894-1914* III, Préface de Jean Starobinski, Gallimard, 1990.
- ㉒ Maurice Merleau-Ponty, *L'institution, la passivité, Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Belin, 2003, pp.63-77. 加國尚志「感情の制度化—メルロー・ポンティの一九五四—一九五五年講義より」『立命館文学』第五八七号 二〇〇四年十二月 参照。
- ㉓ Maurice Merleau-Ponty, *Signes*, Gallimard, 1960, p.296.
- ㉔ Maurice Merleau-Ponty, *Sens et non-sens*, Gallimard, 1996, p.35.

- ②4 *Ibid.*
- ②5 *Ibid.*
- ②6 *Ibid.*, p.36.
- ②7 *Ibid.*
- ②8 *Ibid.*
- ②9 S・ド・ボーヴォワール『招かれた女(上・下)』川口篤・笹森猛正訳 新潮文庫。エマニュエル・ド・サントペールは、メルロ＝ポンティがボーヴォワールの『他人の血』に影響を受けていることを指摘している。Emmanuel de Saint Aubert, *Op.cit.*, pp.67-71. また、ポンティはメルロ＝ポンティが論じている主題がサルトルの『出口なし』や『汚れた手』とも重なる問題であることも容易に見てとれよう。
- ③0 *Ibid.*, p.46.
- ③1 *Ibid.*, p.47.
- ③2 *Ibid.*, p.51.
- ③3 この時期の、サルトル、ボーヴォワール、メルロ＝ポンティの共通のテーマとして道徳論が挙げられよう。Jean-Paul Sartre, *Cahier pour une morale*, Gallimard, 1983. Simone de Beauvoir, *Pour une morale de l'ambiguïté*, Gallimard, 1947. Maurice Merleau-Ponty, *Humanisme et Terreur*, Gallimard, 1947. Cf. Emmanuel de Saint Aubert, *op.cit.*, pp.56-60.
- ③4 *Signes*, p.250.
- ③5 和田渡『自己の探究 自己の心とあつとつて』ナカニシヤ出版 2005年 第三章 参照。
- ③6 *Ibid.*, p.265.
- ③7 *Ibid.*, p.266.
- ③8 「逆に、真の悲劇が始まるのは、同じ人間が彼の行動の客観的な姿を否認することができないこと、自分が歴史の文脈の中で他者たちにとって存在するところのものであること、そしてそれにもかかわらず彼の行動の動機は、彼がそれを直ちに証明するとおりの人間の価値のままであること、同時に理解した時である。その場合には内部と外部、主観性と客観性、判断と機構の間には、もはや私たちは一連の動揺を持つのではなく、弁証法的関係、すなわち真理に基づいた矛盾を持つのであり、同じ人間が二つの平面に自分を認めようと試みるのである。」*Humanisme et Terreur*, p.156.
- たとえばモーリス・ブランショが「文学は自ら両義性を生み出す言語である」と述べている点に注目してはよいであろう。Maurice Blanchot, *La part du feu*, Gallimard, 1949, p.328. ブランショは「両義性」という観点から、ボーヴォワールの『招かれた女』に言及している。*Ibid.*, pp.196-197.
- ③9 *Parcours deux*, p.321 suiv.
- ④0 シャン・スタロバンスキーとメルロ＝ポンティの関係については、Carmelo Colangelo, *Jean Starobinski : Apprentissage du regard*, Editions Zoé, 2004 参照。メルロ＝ポンティの編纂した『著名な哲学者たち』(*Les philosophes célèbres*, Maznod, 1956) のモンテーニユの項目をスタロバンスキーが担当し、その後彼が発表したモンテーニユ論 (Jean Starobinski, *Montaigne en mouvement*, dans *La Nouvelle revue française* no.85,86, 1960.) にメルロ＝ポンティが言及している。*Signe*, p.30.
- またメルロ＝ポンティは1960-1961年講義でブルーストの空間について言及しているが (Notes de cours 1959-1961, p.197.)、プレーが『ブルースト的空間』を1964年の一九六三年である。Gerges Poulet, *L'espace proustien*, Gallimard, 1963. メルロ＝ポンティとテーマ批評の関係については「風景」(paysage) に関してジャン＝ピエール・リニヤールを例に引いて述べたものとして、Michel Collot, *L'œuvre comme paysage d'une expérience*, dans *Merleau-Ponty & littéraire*.
- ④1 *Ibid.*, p.351.
- ④2 *Ibid.*, p.352.
- ④3 *Ibid.*
- ④4 *Ibid.*
- ④5 *Ibid.*, p.353.
- ④6 *Ibid.*
- ④7 *Sens et non-sens*, p.48.
- ④8 Paul B. Armstrong, *The Phenomenology of Henry James*, The

University of North Carolina Press, 1983, p.6.

④⑨ Maurice Merleau-Ponty, *Éloge de la philosophie*, Gallimard, 1952.

⑤⑩ *Signes*, p.47.

⑤⑪ 本論文は平成22年度科学研究費補助金(基盤研究C)「メルロ＝ポン

テイ存在論における文学の位置づけ」の助成を受けて行われた研究の成果である。

(本学文学部教授)